



kaminorippo.org

神の律法：付録6：キリスト教徒のための禁じられた肉

すべての生き物が食物として創造されたわけではない

エデンの園：植物ベースの食事

この真実は、人類の始まりであるエデンの園を調べると明らかになります。最初の人間アダムには、園を世話する任務が与えられました。どのような園だったのか？元のヘブライ語テキストでは具体的に述べられていませんが、それが果樹園であったという説得力のある証拠があります：

「そして主なる神は、エデンの東に園を植え...地上から主なる神は、見るに心地よく、食物に良いすべての木を生えさせた」(創世記2:15)。

アダムが動物に名前をつけ、世話をする役割についても読んでいますが、木々のように動物も「食物に良い」と聖書が示唆している箇所はありません。

神の計画における動物の消費

これが肉を食べることが神によって禁じられているという意味ではありません—もしそうであれば、聖書全体にそのような明確な指示があるはずです。しかし、人類の食事に動物の肉の消費が最初から含まれていなかったことを示しています。

人間の初期段階における神の最初の供給は、果物やその他の植物を強調する完全に植物ベースであったようです。

清い動物と不清い動物の区別

ノアの時代に導入された

神は最終的に人間が動物を殺して食べることを許可しましたが、消費に適した動物とそうでない動物との間に明確な区別が設けられました。

この区別は、洪水前にノアに与えられた指示で初めて示唆されています：

「すべての清い動物を7つがいずつ、オスとそのつがいを、そしてすべての不清い動物を1つがいずつ、オスとそのつがいを連れて行きなさい」(創世記7:2)。

清い動物に関する暗黙の知識

神がノアに清い動物と不清い動物を見分ける方法を説明しなかったという事実は、そのような知識がすでに人類に根付いていたことを示唆しています。おそらく創造の最初からかもしれません。

清い動物と不清い動物の認識は、自然のおよび霊的な枠組みの中で特定の役割や目的のために特定の生き物が区別された、より広範な神の秩序と目的を反映しています。

清い動物の初期の意味

犠牲に関連している

これまでの創世記の物語で起こったことに基づいて、洪水まで、清い動物と不清い動物の区別は、犠牲としての受け入れ可能性にのみ関連していたと安全に推測できます。

アベルが群れの初子を捧げたことは、この原則を強調しています。ヘブライ語テキストでは、「群れの初子」(יֶלֶד בְּרִיחַ)というフレーズは、「群れ」(tzon、צֶן)という単語を使用しており、これは通常、羊やヤギなどの小型の家畜を指します。したがって、アベルが群れから子羊か若いヤギを捧げた可能性が最も高いです(創世記4:3-5)。

ノアの清い動物の犠牲

同様に、ノアが箱舟から出たとき、彼は祭壇を築き、洪水前に神の指示で特に言及された清い動物を使って、主に焼き尽くす供え物を捧げました(創世記8:20; 7:2)。

犠牲のための清い動物に対するこの初期の強調は、礼拝と契約の純粋さにおけるそれらの独特な役割を理解するための基礎を築きます。

これらのカテゴリーを表すヘブライ語—**tahor**(טָהוֹר)と**tamei**(טָמֵא)—は恣意的ではありません。それらは主のための聖さと分離の概念と深く結びついています：

- תָּמֵי (Tamei)

意味: 不浄、不純。

用法: 儀式的、道徳的、または物理的な不純さを指します。消費や礼拝が禁じられている動物、物体、行為によく関連します。

例: 「それでも、これらは食べてはならない...それらはあなたにとって不浄 (*tamei*) である」(レビ記 11:4)。

- טָהוֹר (Tahor)

意味: 清い、純粋。

用法: 消費、礼拝、または儀式活動に適した動物、物体、人々を指します。

例: 「あなたは聖なるものと普通のもの、清いものと不清いものを区別しなければならない」(レビ記 10:10)。

これらの用語は、後にレビ記11と申命記14で詳細に述べられる神の食事法の基礎を形成します。これらの章では、清い(食物として許される)動物と不清い(食べるのが禁じられている)動物が明確にリストされており、神の民が区別され聖なるままであることを保証します。

不清い肉を食べるに対する神の警告

タナハ(旧約聖書)全体を通じて、神は彼の民が彼の食事法を破ることに對して繰り返し警告しました。いくつかの箇所は特に不清い動物の消費を非難し、この行為が神の戒めに対する反逆と見なされたことを強調しています:

「私の顔を絶えず挑発する民...豚の肉を食べ、不純な肉のスープを鍋に入れる者たち」(イザヤ65:3-4)。

「庭に入るために自分を聖別し清める者たち、豚、ネズミ、その他の不清いものを食べる者たちに従う者—彼らは従う者と共に終わりを迎える」と主は宣言します(イザヤ66:17)。

これらの叱責は、不清い肉を食べることが単なる食事の問題ではなく、道徳的および靈的な失敗であることを強調しています。そのような食物を消費する行為は、神の指示に対する反抗と結びついていました。明確に禁じられた行為にふけることで、民は聖さと服従を無視していることを示しました。

イエスと不清い肉

イエスの到来、キリスト教の興隆、新約聖書の著作により、多くの人々が神が彼の律法への服従、特に不清い食物に関する規則をもう気にしていないのではないかと疑問を抱き始めました。実際には、キリスト教世界のほぼ全員が好きなものを何でも食べます。

しかし、事実として、旧約聖書にはメシアが不清い肉の律法や父の他の律法を取り消すという予言はありません(一部が主張するように)。イエスはこの点を含め、父の条例をすべて明確に従いました。もしイエスが豚肉を食べていたら、我々が彼が魚(ルカ24:41-43)や子羊(マタイ26:17-30)を食べたことを知っているように、模範による明確な教えがあったでしょうが、それがそうではなかったことはわかっています。イエスと彼の弟子たちが預言者を通じて神から与えられたこれらの指示を破ったという証拠はありません。

反論される主張

偽りの主張:「イエスはすべての食物を清いと宣言した」

真実:

マルコ7:1-23は、イエスが不潔い肉に関する食事法を廃止した証拠としてよく引用されます。しかし、テキストを注意深く調べると、この解釈が根拠のないものであることがわかります。一般的に誤引用される節は次のように述べています:

「『食物は心に入らず、胃に入り、廃棄物として排出されるからだ。』(これによって彼はすべての食物を清いと宣言した)」(マルコ7:19)。

文脈: 清い肉と不潔い肉についての話ではない

まず第一に、この箇所の文脈はレビ記11に記載されている清い肉や不潔い肉とは全く関係がありません。代わりに、イエスとファリサイ派の人々との間で、食事法とは無関係なユダヤの伝統についての議論に焦点を当てています。ファリサイ派と律法学者たちは、イエスの弟子たちが食べる前に儀式的な手洗いを行わなかったことに気付きました。これはヘブライ語で *netilat yadayim* (נטילת ידים) と呼ばれ、祝福を伴って手を洗う儀式であり、今日でも特に正統派のユダヤ人コミュニティで守られている伝統的な慣習です。

ファリサイ派の関心は神の食事法ではなく、この人間が作った伝統の遵守についてでした。彼らは弟子たちがこの儀式を行わなかったことを彼らの慣習の違反と見なし、不潔と同等としました。

イエスの応答: 心が重要である

イエスはマルコ7章の多くの部分で、真に人を汚すのは外部の慣習や伝統ではなく、心の状態であると教えています。彼は、霊的な不潔が罪深い考えや行動から内側から来るものであり、儀式的な儀式を守らないことから来るのではないと強調しました。

イエスが食物は人を汚さないと説明する時、それは消化系に入り心に入らないからであり、彼は食事法ではなく儀式的な手洗いの伝統について語っています。彼の焦点は外面的な儀式ではなく内面的な純粋さにあります。

マルコ7:19を詳しく見る

マルコ7:19は、聖書出版社がテキストに挿入した存在しない括弧付きの注釈、「これによって彼はすべての食物を清いと宣言した」によってしばしば誤解されています。ギリシャ語テキストでは、文は次のようにのみ述べています:

「ὅτι οὐκ εἰσπορεύεται αὐτοῦ εἰς τὴν καρδίαν ἀλλ' εἰς τὴν κοιλίαν καὶ εἰς τὸν ἀφεδρῶνα ἐκπορεύεται

καθαριζον παντα τα βρωματα」、これは文字通り「それが彼の心に入らず、腹に入り、便所に出て行き、すべての食物を清める」と訳されます。

「便所に出て行き、すべての食物を清める」と読んで、「これによって彼はすべての食物を清いと宣言した」と翻訳するのは、神学校や聖書出版社の中で神の律法に対する一般的な偏見にテキストを合わせようとする明らかな試みです。

より理解しやすいのは、イエスが当時の日常的な言葉で食事のプロセスを説明しているという全体の文です。消化系は食物を取り込み、体が必要とする栄養素と有益な成分(清い部分)を抽出し、残りを廃棄物として排出します。「すべての食物を清めるまたは浄化する」というフレーズは、おそらく有用な栄養素を捨てられるものから分離するこの自然なプロセスを指しているのでしょう。

この偽りの主張に対する結論

マルコ7:1-23は神の食事法を廃止することではなく、心の問題よりも外部の儀式を高くする人間の伝統を拒否することについてです。イエスは、真の汚れは儀式的な手洗いを守らないことからではなく、内側から来ると教えました。「イエスがすべての食物を清いと宣言した」という主張は、神の永遠の律法に対する偏見に根ざしたテキストの誤解です。文脈と原語を注意深く読むことで、イエスがトーラーの教えを支持し、神が与えた食事法を否定しなかったことが明らかになります。

偽りの主張:「神は幻の中で使徒ペテロに、我々が今やどんな動物の肉でも食べられると告げた」

真実:

多くの人々が使徒行伝10章のペテロの幻を、神が不清い動物に関する食事法を廃止した証拠として引用します。しかし、幻の文脈と目的を詳しく調べると、それが清い肉と不清い肉に関する律法を覆すものではなく、ペテロに異邦人を神の民として受け入れることを教えるためのものだったことが明らかになります。神が与えた食事に関する指示を変更するものではありません。

ペテロの幻とその目的

使徒行伝10章で、ペテロは天から降りてくるシートに、清い動物と不清い動物の両方を含むすべての種類の動物が入っており、「殺して食べなさい」という命令を伴う幻を見ます。ペテロの即座の反応は明確です:「決して、主よ! 私は不浄なものや不清いものを決して食べたことはありません」(使徒行伝10:14)。

この反応はいくつかの理由で重要です:

1. ペテロの食事法への服従

この幻はイエスの昇天とペンテコステでの聖霊の注ぎの後に起こります。もしイエスとその ministry の中で食事法を廃止していたなら、イエスの親しい弟子であるペテロはそれを知ってお

り、強く反対することはなかったでしょう。ペテロが不清い動物を食べることを拒否した事実は、彼が依然として食事法を守っており、それらが廃止されたという理解がなかったことを示しています。

2. 幻の本当のメッセージ

幻は3回繰り返され、その重要性が強調されますが、その真の意味は数節後にペテロが異邦人であるコルネリウスの家を訪れるときに明らかになります。ペテロ自身が幻の意味を説明します：

「神は私に、誰をも不浄または不清と呼んではならないと示されました」(使徒行伝10:28)。

幻は食物についてではなく、象徴的なメッセージでした。神は清い動物と不清い動物のイメージを用いて、ユダヤ人と異邦人の間の障壁が取り除かれ、異邦人が神の契約共同体に受け入れられることをペテロに教えました。

「食事法が廃止された」主張の論理的矛盾

ペテロの幻が食事法を廃止したと主張することは、いくつかの重要な点を無視しています：

1. ペテロの初期の抵抗

食事法がすでに廃止されていたなら、ペテロの反対は意味を成しません。彼の言葉は、イエスに従った数年後もこれらの律法への継続的な遵守を反映しています。

2. 廃止の聖書的証拠がない

使徒行伝10章のどこにも、食事法が廃止されたと明示的に述べられていません。焦点は完全に異邦人の包含にあり、清い食物と不清い食物の再定義ではありません。

3. 幻の象徴性

幻の目的は、その適用において明らかになります。ペテロが神が偏見を示さず、彼を恐れ、正しい行いをするすべての国の人々を受け入れると気づいたとき(使徒行伝10:34-35)、幻が偏見の打破についてであり、食事規定についてではないことが明らかです。

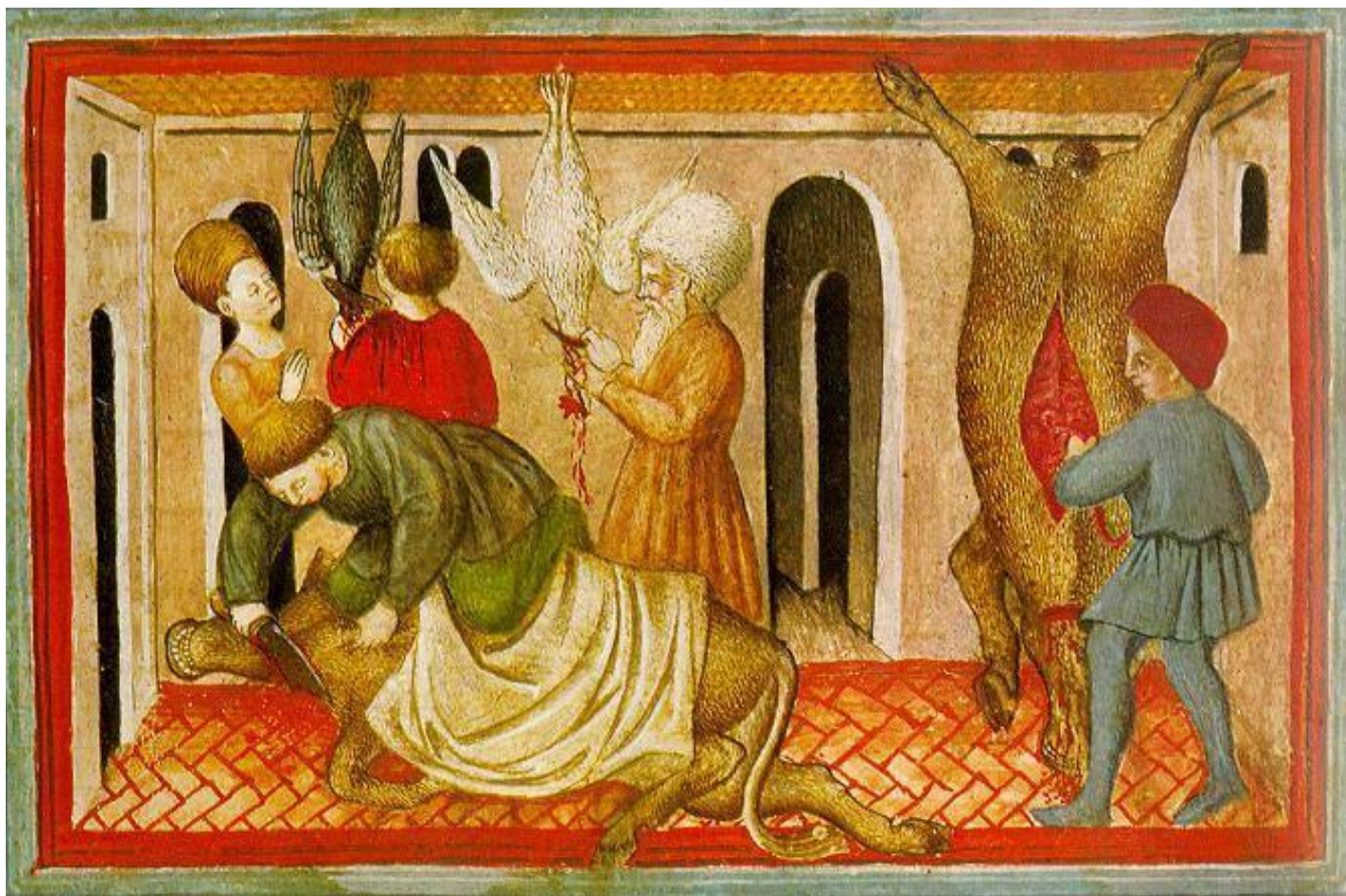
4. 解釈の矛盾

幻が食事法の廃止に関するものであれば、使徒行伝のより広い文脈と矛盾します。そこでは、ペテロを含むユダヤ人信者がトーラーの指示を守り続けていました。さらに、幻を文字通りに解釈するとその象徴的な力が失われ、食事慣習だけを扱い、異邦人の包含というより重要な問題には触れないことになります。

この偽りの主張に対する結論

使徒行伝10章のペテロの幻は食物についてではなく、人々についてでした。神は清い動物と不清い動物のイメージを用いて、福音がすべての国に開かれており、異邦人を不浄または神の民から除外されたと見なすべきではないという深い霊的真理を伝えました。この幻を食事法の撤回と解釈するのは、箇所本文脈と目的の両方を誤解することです。

レビ記11章で神が与えた食事に関する指示は変わらず、この幻の焦点ではありませんでした。ペテロ自身の行動と説明がこれを確認しています。幻の本当のメッセージは、人々間の障壁を打ち破ることについてであり、神の永遠の律法を変更することではありません。



聖書の規則に従って血を抜くために肉を準備する肉屋の古い絵画。レビ記11章に記載されているすべての清い動物、鳥、陸の動物について。

偽りの主張:「エルサレム会議は、異邦人が絞め殺されたものや血のあるものを除いて何でも食べてもよいと決定した」

真実:

エルサレム会議(使徒行伝15章)は、異邦人が神のほとんどの戒めを無視し、4つの基本的な要件だけを守ればよいと許可されたとしばしば誤解されます。しかし、詳しく調べると、この会議は異邦人のための神の律法を廃止することではなく、メシアニック・ユダヤ人コミュニティへの初期参加を容易にすることに關するものでした。

エルサレム会議は何についてだったのか？

会議で扱われた主要な質問は、異邦人が福音を聞き、最初のメシアニック集会に参加する前に、割礼を含むトーラー全体に完全に服従する必要があるかどうかでした。

何世紀にもわたり、ユダヤ人の伝統では、異邦人がトーラーを完全に守る—割礼の採用、安息日の遵守、食事法、その他の戒めなど—前に、ユダヤ人が自由に彼らと交流することはできないとされていました(マタイ

10:5-6; ヨハネ4:9; 使徒行伝10:28参照)。会議の決定は、異邦人がこれらの律法すべてに即座に従わなくても信仰の旅を始められることを認める変化を示しました。

調和のための4つの初期要件

会議は、異邦人が以下の慣習を避けることを条件に、そのまま集会に参加できると結論付けました(使徒行伝15:20)：

1. 偶像に汚された食物：偶像に捧げられた食物の消費を避ける。これはユダヤ人信者にとって偶像崇拝が非常に不快だったためです。
2. 性的不道徳：異教の慣習で一般的だった性的罪を控える。
3. 絞め殺された動物の肉：不適切に殺された動物を食べるのを避ける。これは血が残り、神の食事法で禁じられているためです。
4. 血：血を消費するのを避ける。これはトーラーで禁止された行為です(レビ記17:10-12)。

これらの要件は、異邦人が守るべきすべての律法 요약 ではありませんでした。むしろ、混在する集会でユダヤ人信者と異邦人信者の間の平和と一致を確保するための出発点として機能しました。

この決定が意味しなかったこと

これら4つの要件だけが異邦人が神を喜ばせ、救いを受けるために守るべき唯一の律法だったと主張するのはばかげています。

- 異邦人は十戒を破ってもよいのか？
 - 他の神々を崇拝したり、神の名をみだりに使ったり、盗んだり、殺したりしてもよいのか？もちろん違います。そのような結論は、義に関する神の期待について聖書が教えるすべてのものと矛盾します。
- 出発点であり、終点ではない：
 - 会議は、異邦人がメシアニック・ユダヤ人の集会に参加できるようにする即時の必要性に対処しました。彼らが時間とともに知識と服従において成長することが前提とされていました。

使徒行伝15:21が明確化を提供

会議の決定は使徒行伝15:21で明確化されています：

「モーセの律法[トーラー]は古くからすべての町で説かれ、毎安息日にシナゴークで読まれているからです。」

この節は、異邦人がシナゴークに参加し、トーラーを聞くことで神の律法を学び続けることを示しています。会議は神の戒めを廃止したのではなく、異邦人が過度な負担なく信仰の旅を始めるための実際的なアプローチを確立しました。

イエスの教えからの文脈

イエス自身が神の戒めの重要性を強調しました。例えば、マタイ19:17とルカ11:28、そして山上の説教全体（マタイ5-7）で、イエスは殺人、姦淫を犯さないこと、近隣の人々を愛することなど、神の律法に従う必要性を肯定しました。これらの原則は基礎的であり、使徒たちによって否定されることはなかったでしょう。

この偽りの主張に対する結論

エルサレム会議は、異邦人が何でも食べてもよいとか、神の戒めを無視してもよいと宣言していません。特定の課題、つまり異邦人がトーラーのすべての側面を即座に採用せずにメシアニック集会に参加する方法に対処しました。4つの要件は、ユダヤ人と異邦人の混在する共同体で調和を促進するための実際的な措置でした。

期待は明確でした：異邦人は毎安息日にシナゴグで読まれるトーラーの教えを通じて、時間とともに神の律法の理解を深めるでしょう。それ以外を主張することは会議の目的を誤解し、聖書のより広い教えを無視することになります。

偽りの主張：「使徒パウロは、キリストが救いのために神の律法に従う必要性を取り消したと教えた」

真実：

多くのキリスト教指導者、ほとんどの場合がそうでなくとも、パウロが神の律法に反対し、異邦人改宗者に彼の戒めを無視するよう指示したと誤って教えています。一部は、神の律法に従うことが救いを危険にさらすとさえ示唆します。この解釈は重大な神学的混乱を引き起こしています。

この見解に同意しない学者たちは、パウロの著作をめぐる論争に対処し、彼の教えが律法と救いに関して誤解されているか文脈から外れていることを示そうと苦労してきました。しかし、私たちのミニストリーは異なる立場を取ります。

パウロを説明することが誤ったアプローチである理由

私たちは、パウロの律法に対する立場を大いに説明する必要はない—そしてそれは主に対する冒瀆でさえある—と信じています。そうすることは、人間であるパウロを神の預言者やイエス自身と同等またはそれ以上の地位に高めることになります。

代わりに、正しい神学的アプローチは、パウロ以前の聖書が、イエスの後に神の律法を無効にするメッセージを教える誰かが来ることを予言または支持していたかどうかを調べることです。そのような重要な預言が存在するなら、パウロのこの問題に関する教えが神聖に認められたものとして受け入れる理由があり、それを理解しそれに従って生きるために最善を尽くすことが意味を成すでしょう。

パウロについての預言の不在

現実には、聖書にはパウロ—または他の人物—が神の律法を取り消すメッセージをもたらすという預言はありません。新約聖書に登場する旧約聖書で明確に預言された唯一の人物は以下の通りです：

1. バプテスマのヨハネ：メシアの先駆者としての彼の役割が予言され、イエスによって確認されました（例：イザヤ40:3、マラキ4:5-6、マタイ11:14）。
2. ユダ・イスカリオテ：詩篇41:9や詩篇69:25などの箇所の間接的な言及が見られます。
3. アリマタヤのヨセフ：イザヤ53:9がイエスの埋葬を提供した者として彼に間接的に言及しています。

これらの人物以外には、タルソス出身の誰かを含め、神の戒めを無効にしたり、異邦人が彼の永遠の律法への服従なしに救われると教えるために遣わされる誰かについての預言は存在しません。

イエスが昇天後に起こると予言したこと

イエスは地上でのミニストリー後に何が起こるかについて多くの予言をしました。以下が含まれます：

- 神殿の破壊（マタイ24:2）。
- 彼の弟子たちの迫害（ヨハネ15:20、マタイ10:22）。
- 王国メッセージのすべての国への広がり（マタイ24:14）。

しかし、タルソス出身の誰か—ましてやパウロ—が救いと服従に関する新しくまたは相反する教義を教える権限を与えられたという言及はありません。

パウロの著作の真の試練

これは、パウロやペテロ、ヨハネ、ヤコブの著作を無視すべきだということではありません。代わりに、それらの著作に慎重に取り組み、解釈が基礎となる聖書—旧約聖書の律法と預言者、そして福音書におけるイエスの教え—と一致することを確認する必要があります。

問題は著作そのものではなく、神学者や教会指導者がそれらに押し付けた解釈にあります。パウロの教えの解釈は以下によって支持されなければなりません：

1. 旧約聖書：神の預言者を通じて明らかにされた神の律法。
2. 四つの福音書：律法を支持したイエスの言葉と行動。

解釈がこれらの基準を満たさない場合、それは真実として受け入れられるべきではありません。

この偽りの主張に対する結論

パウロが食事に関する指示を含む神の律法の取り消しを教えたという主張は、聖書によって支持されていません。そのようなメッセージを予告する預言はなく、イエス自身が律法を支持しました。したがって、それに反する教えは、神の変わらない言葉に対して精査されなければなりません。

メシアの従者として、私たちは神によってすでに書かれ明らかにされたものと一致することを求められており、彼の永遠の戒めに矛盾する解釈に頼るべきではありません。



異なる動物の4つの蹄、一部は分かれ、一部は固く、レビ記11章に基づく清い動物と不清い動物についての聖書の律法を示しています。

イエスの教え、言葉と模範を通じて

キリストの真の弟子は、彼の人生全体を模範とします。彼は我々が彼を愛するなら、父と子に服従すべきであると明確にしました。これは気弱な者に対する要求ではなく、神の王国に目を固定し、永遠の命を得るために必要なことは何でもする覚悟のある者に対するものです—たとえそれが友人、教会、家族からの反対を引き起こすとしても。髪と髭、ツイット、割礼、安息日、そして禁じられた肉に関する戒めは、ほぼすべてのキリスト教徒によって無視されており、群衆に従うことを拒否する者は確実に迫害に直面するでしょう、イエスが我々に語った通りです(マタイ5:10)。神への服従には勇気が必要ですが、その報酬は永遠です。

神の律法による禁じられた肉

神の食事法は、トラーに概説されており、彼の民が食べてもよい動物と避けなければならない動物を具体的に定義しています。これらの指示は聖さ、服従、そして汚す慣習からの分離を強調します。以下は、聖書の参照付きで禁じられた肉の詳細かつ記述的なリストです。

1. 反芻せず、蹄が分かれていない陸の動物

- これらの特徴の一方または両方を欠く動物は不清いと思なされます。
- 禁じられた動物の例：
 - ラクダ (gamal、גמל) – 反芻しますが、蹄が分かれていません (レビ記11:4)。
 - 馬 (sus、סוס) – 反芻せず、蹄も分かれていません。
 - 豚 (chazir、חזיר) – 蹄が分かれています、反芻しません (レビ記11:7)。

2. ひれと鱗のない水生生物

- ひれと鱗の両方を持つ魚だけが許されます。どちらかを欠く生物は不清いです。
- 禁じられた生物の例：
 - ナマズ – 鱗がありません。
 - 貝類 – エビ、カニ、ロブスター、ハマグリを含みます。
 - ウナギ – ひれと鱗がありません。
 - イカとタコ – ひれも鱗もありません (レビ記11:9-12)。

3. 猛禽類、腐食動物、その他の禁じられた鳥

- 律法は、捕食的または腐食的な行動に関連する特定の鳥を食べてはならないと定めています。
- 禁じられた鳥の例：
 - ワシ (nesher、נֶשֶׁר) (レビ記11:13)。
 - ハゲタカ (da'ah、דָּאָה) (レビ記11:14)。
 - カラス (orev、עֹרֵב) (レビ記11:15)。
 - フクロウ、タカ、ウミウ、その他 (レビ記11:16-19)。

4. 四足で歩く飛ぶ昆虫

- 飛ぶ昆虫は、跳ぶための関節のある脚を持たない限り、一般的に不清いです。
- 禁じられた昆虫の例：
 - ハエ、蚊、カブトムシ。
 - しかし、バッタとイナゴは例外で許されています (レビ記11:20-23)。

5. 地面を這う動物

- 腹で動くか、複数の脚で地面を這う生物はすべて不清いです。
- 禁じられた生物の例：
 - ヘビ。
 - トカゲ。
 - ネズミとモグラ (レビ記11:29-30、11:41-42)。

6. 死んだまたは腐敗した動物

- 清い動物であっても、自然死したものや捕食者に裂かれた死骸は食べるのが禁じられています。
- 参照：レビ記11:39-40、出エジプト記22:31。

7. 異種交配

- 直接的な食事法ではありませんが、種の交配は禁じられており、食品生産慣行における注意を意味します。

- 参照：レビ記19:19。

これらの指示は、神の民が彼らの食事の選択においても彼を尊び、異なる存在であることを望む神の意志を示しています。これらの律法を守ることで、彼の従者は服従と彼の命令の聖さへの敬意を示します。